

第36回神戸女学院大学英語英文学会(KCSES)大会報告

英文学科長 立石 浩一

英文学科卒業生・大学院生・大学院修了生の研究発展および在学生の向学意欲の推進を目的として設立された神戸女学院大学英文学会(KCELS)は、昨年度の第35回大会より、名称を神戸女学院大学英語英文学会(KCSES)と改称し、2年目を迎えた。例年通り11月の最終金曜日に午後2時からL-28教室で開催された。特別講演とOG・院修了生の研究発表という2部構成で、今回は英語学研究セッションが学会準備を担当した。

特別講演には大阪大学大学院文学研究科教授の金水 敏先生に、「映画・アニメに出てくる“なまった英語” —役割語の観点から—」という演題でご講演いただいた。役割語とは、ある特定の人物像に人々がイメージとして持っている、その人のステロタイプの言葉遣い(実際に使われているかどうかは問わない)であり、金水先生は、この分野のパイオニア的研究者である。通例、この種の研究においては、なぜ映画やアニメの老人が「～じゃよ」という言い回しをするのか、などが例として出されるが、今回は英語に研究対象を絞り、黒人風の英語やアジア人風の英語が、いかに実態と関係の無い所でステロタイプ化されているかについて、映画の例などを引用し、大変興味深い講演をしていただいた。英語のステロタイプ化の裏にある社会的階層意識・優位性の意識等を掘り起こすという、普段あまり考えない観点から英語を見ることが出来、非常に有意義な時間であった。

研究発表では、本学卒業生で、現在近畿大学非常勤講師の古東 佐知子氏が、「リチャード・ライトと植民地主義—ディアスポラ黒人の視点」、続いて、本学大学院英文学専攻通訳翻訳コース修了生の山崎 美保氏が、「Subtitle Translation of Comedies: From Relevance Theoretic Approach」

という標題で、それぞれ発表された。どちらも大変興味深い内容で、質問も活発に行われた。

当日までご尽力下さった主幹幹事の松尾先生、ご参加下さった皆様、及び日頃KCSESをご支援いただいている会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

特別講演

映画・アニメに出てくる“なまった英語”
—役割語の観点から—

大阪大学大学院文学研究科教授 金水 敏

次の例文をご覧ください。

- (1) a. おお、そうじゃ、わしが知っておるんじゃ。
- b. あら、そうよ、わたくしが知っておりますわ。
- c. うん、そうだよ、ぼくが知ってるよ。
- d. んだ、んだ、おら知ってるだ。
- e. そやそや、わしが知ってまっせー。
- f. うむ、さよう、せっしやが存じております。

これらは、論理的な意味としてはすべて同一でありながら、語彙、語法的な面で大きく異なっている。そしてその違いは、主として話し手の人物像(キャラクター)に対応している(それぞれどのような人物像か、お考え下さい)。



このように、特定の人物像と結びついた話し方のヴァリエーションを「役割語」と呼ぶ(金水 2003『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店)。日本語にはこのように役割語と結びついた語彙の指標が豊

富に存在するが、英語ではどうか。例えば上の(1)a-fを英語で訳し分けようとしてもむずかしいであろう。では、英語には役割語はないのか。

ここで改めて、役割語の定義を示しておく。

ある特定の言葉遣い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができるとき、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ（金水 2003, 205頁）。

ここで言葉遣い（あるいは話し方 way of speaking）を語彙的な側面に限らず、音韻・音声も含めて広く見渡すならば、英語にも役割語と呼べるものが存在することは確かである。例えば山口治彦氏（山口 2007「役割語の個別性と普遍性」金水（編）『役割語研究の地平』くろしお出版）では、方言（例：「ハリー・ポッター」シリーズのハグリッド）、ビジン英語（例：中国系探偵チャーリー・チャン）、異様な人称の適用（例：「ハリー・ポッター」シリーズの屋敷妖精ドビー）、赤ちゃん語（例：「ルーニー・テューンズ」のトゥイーティー）の例を挙げている。逆に、英語には(1)aのような〈老人語〉は存在しないとも言っている。

本講演では、山口の挙げた例以外にも、いくつかの類型を挙げて、実例とともに検証したい。例えば（社会）方言の例としては、ロンドンの貧民層の言葉を挙げることができる。「マイ・フェア・レディ」では、ヒロイン・イライザの言葉の変化がまさしく彼女の階層の上昇を意味していた。

また、黒人英語も重要な役割語と言える。ディズニー・アニメ「ダンボ」に登場するカラスたちは、黒人なまりを話し、“ミンストレル・ショー”のような歌を披露する。黒人英語は「風と共に去りぬ」でも重要な役割を果たしている。さらに、今日のヒップホップ文化では、いわゆる“ラップ”に多く黒人英語の影響が現れている。

外国人が話す英語の例としては、「ティファニーで朝食を」の日本人“ユニオシ”の例が興味深い。またディズニー・アニメの「アラジン」シリーズでは、ヒーロー、ヒロインがハリウッド英語を話すのに対し、町の無名の人々はアラブなまりのような英語を話す。

赤ちゃん言葉のなまりは世界普遍的で、日本語でも同様の現象が見受けられる。また、山口は丁寧な表現の例としてドビーの三人称による会話の例を挙げているが、幼児語にも一、二人称の代わりに三人称を用いる例が見られ、セサミストリート“エルモ”の例

を挙げることができる。

これらの英語の表現には、キャラクターを印象づけようとする作者の意図とともに、“ちゃんとしゃべれない”人々に対する偏見も見て取れる。偏見はステレオタイプのすぐ近くにあるのであり、これは日本語でも同様である。

本講演では、さらに翻訳の問題にも触れ、日英と英日を対比した場合の非対称性について検討する。

（参考）「SKの役割語研究所」

<http://skinsui.cocolog-nifty.com/sklab/>

発表要旨

リチャード・ライトと植民地主義— ディアスポラ黒人の視点

古東 佐知子
近畿大学非常勤講師

リチャード・ライトも含めた多数の黒人作家・知識人たちは、20世紀初頭から「ブラック・アトランティック」と呼ばれる、国家の境界線を乗り越えるようなハイブリッドなアイデンティティーを形成したという点で近年評価されている。これにはもともと、ライト以前の黒人作家達は、「黒」対「白」の二元論的思考、もしくは白人性の反転として構築された黒人性を提示するといった点が批判の対象となってきたという背景がある。新しい世代の作家であるライトは、その晩年アメリカという大陸を超えてより広い規模で黒人文化の性質や力関係を論じるようになる。ライト達黒人作家達が、国家の枠組みを超えて創り出した対抗的近代は、自らの起源から距離のある黒人たちの、「黒人性」というアイデンティティーを基盤とする本質主義とは異なった、アンチ本質主義の賜物でもあった。

本発表では、ライトの『ブラック・パワー』（1954）と『アウトサイダー』（1953）を主な対象に、ガーナ独立運動やアジア・アフリカ会議とライトのかかわり、 komunizmus と人種問題のねじれた関係などに光をあて、この作家が大西洋を横断しながら追及した「黒」対「白」の乗り越えについて論じる。これらの作品中には、アメリカの黒人と、植民地主義から独立を得ようとするアフリカの人たちとの微妙な関係、アメリカの黒人問題を政治

的に利用して力を得ようとする白人コミュニティ幹部と、それに縋り付く黒人党员など、複雑な関係性が提示されている。アメリカ南部の人種主義批判というスタンスをとっていた初期の作品に比べると、焦点のあたることが少ない後期の作品を詳細に分析することによって、黒人文化の存在を、国家の枠組みを超えて捉えようとしたライトの可能性を新たに示したい。

発表要旨

Subtitle Translation of Comedies: From Relevance Theoretic Approach

山崎 美保

神戸女学院大学大学院通訳翻訳コース修了

字幕はその字数と時間に制限があるため、いかに製作サイドの意図をくみ取り、異なる文化背景を持つ聴衆に伝えるのが非常に困難である。この困難さはとりわけコメディ映画において顕著である。文字通りの訳では翻訳としては優れていても、必ずしも、聴衆から笑いを引き起こすことはできない。字幕翻訳は現在基本的に個々の翻訳者の裁量にかかっているが、翻訳のプロセスが明示化されればなにか指針となるものができるのではないかと。

本研究ではアメリカのコメディ映画を取り上げ、笑いが英語から日本語に字幕翻訳される際、関連性理論がどうしてその翻訳に行きついたのかを明示化する有効かつ効果的なツールであることを論じる。

関連性理論は翻訳をコミュニケーションの一部として考え、いかにお互いがコミュニケーションをとる中でどのような処理が受け手の頭の中で行われているかを明示化しようとする試みである。また、テキストの解釈においてそれぞれが持つ認知環境が大きく影響することに気づかせてくれるだけでなく、意味の様々な側面を峻別し、それにより「意味のジャングル」の中である一定の方向性を与えてくれる。

本研究では、関連性理論における表意、推意、認知効果などを字幕とオリジナルで比較し、形式的ではない、認知効果レベルでの解釈的類似性を検討し、翻訳プロセスをたどっていった。

このようにプロセスを明示的にすることで、おぼろげによいと感ずる翻訳からレベルの高い翻訳への質の向上が期待できる。

また、関連性の発話解釈の目標である、不必要な苦勞無しで、相手、ここでは登場人物の言葉を聴衆が正しく理解することは、すぐに消えてしまうメディアである字幕にとっては重要であることはもちろん、解釈的類似性を検証する際、聴衆が笑うのか笑えないのかという認知効果も検証するので、関連性理論はコメディの字幕翻訳の理論としては最適であると考えられる。

英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年から卒業論文および卒業プロジェクトのコンテストを開催することとなり、今年度は担当教員からの推薦による応募を受けつけた。全体では24名の応募があり、2月に英米文学、英語学、グローバル・スタディーズ、通訳・翻訳の各部門で選考が行われた。最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者は次の通り。なお、最優秀者の論文は、『優秀卒業論文・プロジェクト集』（2012年度春刊行予定）に掲載する。

英米文学（応募者数 3名）

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

E08052 小南 友里

E08062 前田 早春

英語学（応募者数 8名）

<最優秀賞>

E08151 植村 温子

<優秀賞>

E08092 野条 紫花

グローバル・スタディーズ（応募者数 11名）

<最優秀賞>

E08133 為田 麻央

<優秀賞>

E07126 佐藤 里帆子

通訳・翻訳（応募者数 2名）

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

E08015 後藤 彩末

E08045 川上 万里奈

キャンパスニュース

<退任>

松縄順子特任教授

吉田純子教授

* 出口真紀子准教授は、本年3月末に2年間の任期を終えられます。

* Nigel Gordon Duffieldめぐみ教育基金客員教授は、本年3月末に1年間の任期を終えられます。

<2012年4月より就任>

* 奥村キャサリン氏が、専任講師として本年4月に就任されます。

* 高村峰生氏が、専任講師として本年4月に就任されます。

<所属変更>

* 石川有香氏 2011年4月より、名古屋工業大学教授。

国際学会発表

* 別府恵子氏

イタリアRome、John Cabot Universityで開催されたヘンリー・ジェイムズ協会主催第5回国際ヘンリー・ジェイムズ学会(2011年7月7-10日)にて研究発表。“Transforming Henry James and the‘Situation of Women’”

* 保坂華子氏

Ramada Osaka Hotelで開催された The Asian Conference on Language Learning (2011年6月12日)にて研究発表。“Connecting the‘English’way of thinking and practice in and out of classroom”

* 石川有香氏

韓国ソウルKyoYuk MunHwa HoeKwanホテルで開催されたAsia TEFL (2011年7月27-29日)にて研究発表。“Stereotype of English Speaking Style”

タイ王国コンケンCharoen Thaniホテルで開催されたICTATLL 2011(2011年9月19-21日)にて研究発表。“Bridging the Gap Between General English and Academic English”

アラブ首長国連邦ドバイHoliday Inn Bur Dubaiホテルで開催されたICLLL 2011 (2011年12月28-30日)にて研究発表。“A Corpus-based Research on Thanks in British Dialogue”

タイ王国バンコクImperial Queen’s Parkホテル

で開催されたThailand TESOL Conference (2012年1月27-28日)にて研究発表。“Gender Stereotypes Seen in English Textbooks in Japan”

* 小杉世氏

ニュージーランド、ウェリントンで開催されたSPACLALS Conference (2011年6月23-25日)にて研究発表。“Reading and Teaching Pacific Literature in Japan”

* 奥本京子氏

立命館大学衣笠キャンパスで開催されたAsia-Pacific Peace Research Association (2011年10月14日)にて研究発表。“The Arts-based Approach in Peace Work”

韓国インジェ、Korea DMZ Peace Life Valleyで開催された Northeast Asia Regional Peacebuilding Institute Summer Training にてトレーニングを担当。“Historical and Cultural Stories of Peace”

* 和氣節子氏

神戸国際会議場で開催されたColeridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations : An International Conference (2011年7月16-18日)にて研究発表。“On Artistic Disinterestedness: Coleridge, Kant, and Schopenhauer Compared”

* 吉田純子氏

オーストラリア、Queensland 工科大学で開催されたInternational Research Society for Children’s Literatureの第20回国際学会 (2011年7月4-8日)にて研究発表。“Fear and Safety in Rosa Guy’s *The Friends*: A Girl’s Postcolonial Self-recognition”

大学院生による学会発表

* 山脇野枝氏

広島大学で開催された日本英語教育史学会第27回全国大会(2011年9月18日)にて研究発表。

明治大学で開催されたジェンダー史学会第8回大会 (2011年12月10日)にて研究発表。

記念賞

2011年度、以下の学生に対して、次の学内の記念賞が授与されました。

- 佐々城きく(女32036)記念賞** E09078 松井 亜樹
- デフォレスト記念賞** E09095 村上千ほる
- 丹部トモ(C41)記念賞** GE1039 徳嶺 絢子
- アメリカン・ボード記念賞** E11027 日下貴実花

会員による出版紹介

◇ **別府 恵子氏** *A Voyage Through American Literature and Culture Vis Turkey* ed. Nur Gokalp Akkerman. (共著、Bogazigi Universitesi Yayinevi, 2011)

◇ **東森 勲氏** 『英語ジョークの研究：関連性理論による分析』(単著、開拓社、2011年11月刊)

◇ **石川有香氏** *Corpora and Language Technologies in Teaching, Learning and Research* (共著、University of Strathclyde Publishing, 2011年9月刊)
英語教科書、『連想パブルで覚えるポキャブラリー』(共著、英潮社フェニックス、2011年9月刊)

◇ **奥本京子氏** 『国際関係入門—共生の観点から』(黒澤満編著、共著、東信堂、2011年6月刊)

◇ **立石 浩一氏** 『Origami⁵』(Patsy Wang-Iverson, Robert J. Lang, Mark Yim 編、共著、CRC Press 2011年7月刊、646 pp.) にて “Deictic Properties of Origami Technical Terms and Translatability: Cross-Linguistic Differences between English and Japanese” (13-28 pp.)

◇ **鞆野ひろ子氏** *Immortal Monuments : 16 Modern Japanese Poets* (共訳、思潮社、2011年10月刊)

◇ **吉田純子氏** 『マイノリティは苦しみをのりこえて——アメリカYA小説をよむ』(編著、冬弓舎、2012年3月刊予定)

神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)
(2005年 9月22日改訂)
(2010年 3月 2日改訂)

- (1) 名称
本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。
- (2) 目的
本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修士生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成
本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動
年一回、英語英文学会大会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

I. 大会での発表について

- (1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、KCSES運営委員会で審査の上、決定する。

II. 維持費・参加費について

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3)に関しては、KCSES専用の口座を利用する。



編集後記

よりグローバル化した社会の実態を反映させるべく、KCSESとして新たなスタートをきって、無事1年が過ぎました。今後とも何卒変わらぬご支援の程よろしくお願い申し上げます。

会員消息・出版物のご連絡、ありがとうございます。会員の皆様のご協力に感謝申し上げますと共に、今後の益々の研究の発展をお祈りいたします。

KCSES Newsletter 編集委員

(2011年度運営委員)

○松尾歩 ○溝口薫 ○立石浩一 (ABC順)

KCSES Newsletter No. 27

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会
〒662-8505 西宮市岡田山4-1
Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532
<http://www.kobe-c.ac.jp/english/gakkai/gakkai.html>

2012年3月発行